

# 上杉家の軍記「北越軍談」と蜃気楼

～上杉謙信は本当に蜃気楼を見たのか～

富山県総合教育センター  
研究主事 木下 正博

## 1. はじめに

富山県魚津市は「蜃気楼の見える街」として有名である。この理由は1564年に上杉謙信が魚津の浜で蜃気楼を見たという記録が上杉家の軍記「北越軍談」に残されていることに由来する。しかし、この記述の信憑性については今だ正確には分かっていない。

そこで今回、地元の城址研究家に協力を頂き、上杉謙信の行動を探ると共に、上杉謙信が本当に魚津の浜で蜃気楼を見たのかについて考察してみる。

## 2. 日本で最も古い記録

蜃気楼に関して日本で最も古い記録が「北越軍談」であると指摘したのはいったい、誰なのであろうか。蜃気楼有情<sup>1)</sup>では以下の様に紹介している。この記述からは、根本順吉さんらが指摘したことが分かる。

しんきろう現象にふれた記録は古くからある。「喜見城」の項でも書いたようにインドでは西暦前100年ごろの『大智度論第六』にすでに乾闥婆城のことが書かれ、中国では西暦前の『史記・天官書』や西暦71年の『漢書・天文志』に「海旁蜃氣象楼台」がみえ出現地や時代は不明だが、ここらあたりが最も古い記述だろうといわれている。

日本ではどうだろうか。埼玉大学講師・根本順吉さん（東京都）らは、空海の『性霊集』にある「遠而似水 近無物 走馬流川何処依」は偽水面（逃げ水）を言ったものであろうと推測。今から千百年前という年代からみて、しんきろう的現象をとどめた恐らく日本で最古の記述といえるとしながらも、偽水面の現象は、いわゆる広義のしんきろうであり、狭義のしんきろうには該当しない。だから、しんきろうとしては空海の時代よりかなり下って、元禄11年(1698)に駒谷散人[コマガヤサンゾ]（本名：榎島昭武[マキシマアキタケ]）<sup>\*</sup>が著した『北越軍談』の中に出くする「永禄七年（1564）に上杉謙信らがしんきろうを見た」という記述が最も古いと指摘している。（本文より抜粋）

※駒谷散人の詳細な人物像については不明。ただし、越後の人物ではないようである。

## 3. 「北越軍談」を読むには

「北越軍談」は、長尾家の興起から上杉謙信の死および「御館の乱」に至るまでを全51巻にまとめた長編の軍記である。なお、本書は1698年（元禄11年）に著述されているため、これを読むには、1967年（昭和42年）に井上鋭夫[イノウエトシオ]（金沢大学教授）によって校注された「上杉史料集」<sup>2)</sup>（「北越軍談」他を収録、上・中・下巻）が理解しやすい。

この中で井上は「北越軍談」を次のよう紹介している。本書は、上杉謙信（1530-1578）が活躍した約100年後に書かれているが、内容はそれまでの上杉関係の軍記や「北条五代記」「関八州古戦録」「豆相記」「甲陽軍艦」などを比較検討し、また口碑伝承、旧臣の遺文、貴族豪族の蔵書を調べ著述している。荒唐無稽の記述も少なくはないが、史実と合致するものもあり史料としての価値を見出すことができる。なお、井上は史実と合致しない記述については校注にて指摘している。

さて、「北越軍談」では第29巻に「一、越中魚津蜃楼付乾達婆城ノ事」が記されている。

一、是年（永禄七年）五月下旬より六月半に至り、本庄繁長・柿崎景家を魁首（カイシュ：主だったもの）として、公（上杉謙信）越中国に御在馬。此折節（マヅリ）魚津の海上に於て貝の城造るを見ると、男女老弱浜辺に市をなす事堵（ト）の如し（見物人の多い様子）。暑熱の時に属（アタ）りて、蛤の屯（タム）して霧氣（キキ）を立るにてぞ有ける。中華の書に所謂（イワル）蜃楼是ならん。

故老の説に日、“蜃は車螯(シヤゴウ:シヤコ貝の一種)とて蛤の大なる者也。克く気を吐て楼台の象をなす。南北海に多し。支那登州の海濤(カイトウ:海の波)春夏の間水面を望めば此気あり。城郭市塵髣髴(テンホウツツ)として人馬の往来絡繹(ラケキ)す。土俗呼て海市(カイシ)と云ふ。伝へ聞、西域にも亦是に類する事あり。旭始(め)て出る時、紅輝天に映じて楼門宮闕(ク)現じ、親(チカ)く官人の出入を見る。日転高く昇れば則(ち)消滅す。併(シカガ)肉眼の及(ぼ)す処幻化而已(ニ)、実あるにはあらず。是を乾達婆城と名(づ)く。総て乾坤(ケコン)の間象を含む者、陰陽の二氣に感じて変易の品々なる、測(り)知べからずと云々。(本文より抜粋)

#### 4. 上杉謙信は本当に蜃気楼を見たのか

「北越軍談」では1564年(永禄7年)の5月下旬～6月中旬(新暦6～7月)にかけて上杉謙信<sup>\*</sup>が本庄繁長、柿崎景家らと共に魚津へ来て蜃気楼を見たと言われている。果たして、これは史実であろうか。以下に「越中の武将たち」<sup>3)</sup>を基に1560年代における上杉謙信の行動をまとめてみる。また、1564年の上杉謙信の詳細な行動については、魚津市の城址研究者である菅沼幸春氏の協力を頂きまとめてみた。(\*名前は全て上杉謙信として記載)

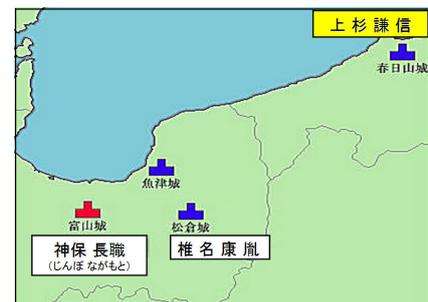
1560年 (永禄3年)		椎名康胤(シヤヤサネ)と 神保長職(ジノボナガト)が対立する。 (新川地区・松倉城) (射水、婦負地区) 上杉謙信が椎名康胤に援軍し神保軍を破る(椎名と友好関係)。 これ以降、上杉謙信は家臣を出自させ椎名康胤を直接支配する。
1564年 (永禄7年)	1月	上杉謙信は常陸国(ヒタノクニ)小田城を攻める。
	2月	上杉謙信は下野国の佐野城を攻める。
	4月	上杉謙信は高崎の和田城を攻めた後、帰国する。
	5月13日	將軍足利義輝が上杉謙信に北条氏との和睦を勧める。
	5月下旬～ 6月中旬	上杉謙信が本庄繁長、柿崎景家らと共に魚津へ来て蜃気楼を見た。 ※「北越軍談」の記述
	6月24日	上杉謙信が弥彦神社(新潟県)に長文の願文を治める。
	6月25日	上杉謙信富岡主税助重朝へ7月8日に関東への出馬の意向を伝える。
	7月	長尾政景(謙信の遠縁)の急死に伴い遺児を引き取る。 上杉謙信は弥彦神社に武田、北条氏退治の祈願をする。 上杉謙信は信濃の国に出陣する。
8月	川中島(第5次)の合戦。	
10月	春日山城へ帰陣する。	
1568年 (永禄11年)		椎名康胤・本庄繁長が武田信玄と手を結ぶ。 以降、上杉謙信が憤慨し松倉城、魚津城を攻略する。 松倉城、魚津城は上杉謙信の城となる。

#### 5. 結論

菅沼氏の調査では、1564年における上杉謙信の行動は、5月中旬～6月下旬にかけて不明であった。ただし、前後の行動からは、兵を挙げての出陣はないと考えられる。

一方、1560年頃～1567年頃にかけては、新川地区一帯を支配していた椎名康胤と上杉謙信は友好関係にあった。さらに上杉謙信は1560年の出兵を契機に越中の軍事体制を一層強化した。実際には、魚津を前線基地とし有力な家臣らを配置し、椎名氏に対して直接支配を敷いていた。

このことから、上杉謙信が1564年の5～6月に直接支配していた魚津へ来ていた可能性は十分に考えられる。よって「北越軍談」の記述は、あながちフィクションではなく史実である可能性があると考えられる。



- 参考文献
- 1) 北日本新聞社：蜃気楼有情、北日本新聞出版部 (1981)
  - 2) 井上鋭夫：上杉史料集(上、中、下)、新人物往来社 (1967)
  - 3) 河田稔：越中の武将たち(上、下)、北日本新聞社 (2012)